

【論文】

教員・保育者養成課程学生の 音楽表現活動に関する一考察②

——歌付き絵本創作の事例検討を中心に——

中野圭子

I. はじめに

5領域は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」から成り、幼児の発達の側面から捉えられたものである。2017年告示の幼稚園教育要領では、第2章ねらい及び内容で「各領域に示すねらいは、幼稚園における生活の全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものであること、内容は、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであることに留意しなければならない。」と記載されている。

5領域の1つである領域「表現」では、子どもたちの様々な表現活動の中でも、音楽表現、身体表現、造形表現の3分野が主に扱われている。筆者は、教員・保育者養成校で音楽に関連する授業を担当しており、領域「表現」の観点である「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」を子どもたちが体験するためには、教員・保育者を目指す学生自身も色々な音や音楽と関わり、5領域間のつながりを意識した総合的な表現活動の実体験を通し、自分の感性や創造性を育ててほしいと考えている。

総合的な表現活動として、これまでも複数の創作活動を実践している。中野(2023)は、音楽劇の創作活動は、領域「表現」の音楽表現、造形表現、身体表現の3分野それぞれに関連した活動がある総合的な表現活動であり、かつ5領域の内容を総合的に体験できる実践的な表現活動でもあり、体験を通した多くの学びがあると述べている。また中野(2025)では、2つの授業で行った音楽づくりの創作活動は、学生の積極的な活動参加が見られ、試行錯誤を経て自分たちがイメージした表現したいものが、創作曲という目に見える成果で表れたことが達成感に繋がったと示している。本研究では、2つの歌付き絵本の製作過程を事例検討し、教員や保育者を目指す学生が歌付き絵本の創作活動の体験を経て、どのような気づきや学びを得るかを考察する。現場を見据え、在学中に経験してほしい音楽表現活動について論じていきたい。

II. 研究方法

1. 絵本を活用した音楽表現活動例

子どもたちに人気がある絵本の1つである『はらぺこあおむし』（エリック・カール 1976）には、色々な関連作品が存在している。2000年に発表されたCD『エリック・カール絵本うた』の1曲として「はらぺこあおむしのうた」（作詞：エリック・カール、日本語訳詞：もりひさし、作曲：新沢としひこ）があり、同楽譜も「いっしょに歌おう！エリック・カール絵本うた」で2007年に出版されている。『はらぺこあおむし』は、絵本を元に歌が作曲されているが、歌を元にして絵本が作られた作品もあり、『おばけなんてないさ』（せなけいこ 2009）や『おべんとうばこのうた』（さいとうしのぶ 2013）などが挙げられる。これらのように、絵本と歌が存在している作品は、絵本の読み聞かせの前後の活動として歌も取り入れることができるだろう。表現活動の幅も広がり、保育現場でも多く活用されているのではないだろうか。

教員・保育者養成校の授業でも、絵本を活用した音楽表現活動は積極的に取り入れられている。澤田（2014）は、童謡の歌唱からイメージした絵本を作成する試みから「歌から絵本をイメージすることのできる保育者・教育者は、その実践を通して子どもの歌にこめられた教訓を音楽として表現しながら、同時に歌の世界を想像することができる（p.66）」と述べている。柚木（2020）は、絵本にBGMを音付けする活動から、学生は絵本の「読み」を邪魔することなく音による登場キャストのテーマモチーフを考え、繰り返しやバリエーションについても工夫を凝らし、心情や状況を表すことにも楽器を使用する可能性を追求することができ、単なるBGMとしての音楽の使い方ではなく、その状況にふさわしい音を自分で考えて創り出すおもしろさを感じとり楽しんでいた学生の様子を報告している。内山（2020）は、既存の歌が付いていない絵本（お話）に即興的に節を付ける実践から、リズムはどの学生もその言葉のリズム（例：あったとさ→タンタタタン）を取り入れており類似性が見られ、メロディは音の並び（上行、下行）や調性に違いが見られ、学生一人ひとりのイメージの違いがあったと報告している。

同一の絵本や歌であっても学生のイメージすることや受けとめ方は異なり、それぞれの形で表現しているこれらの活動は、学生の表現力や創造性を豊かにすることのできる実用的な授業内容の1つであると考えられる。これらの研究は、既存の童謡から絵本を創作する実践や、既存の絵本にBGMや即興的に節を創作する実践であり、既存の絵本や歌に依拠せずに、オリジナルの歌付き絵本の創作実践の例はほとんど見当たらない。本研究では、2つのオリジナル歌付き絵本の創作活動に焦点を当て、事例検討していくものとする。

2. 歌付き絵本の創作活動

表1 2つの歌付き絵本の概要

	もりのおんがくたい	ころとまるのおひるね
授業名	A 短大 卒業研究	B 大学 児童教育研究 (2)
創作期間	2017年11月～2018年2月	2024年4月～2024年11月
創作者	2年生 8名	4年生 2名
総ページ数	35ページ(テキスト16ページ、原画16ページ)	27ページ
テキストと絵	別ページ	同ページ
サイズ	B6	A4
挿入歌	1～7番	1～3番
実践日	2018年2月	2024年11月
実践方法	絵本を台本にした音楽劇	読み聞かせ(楽器の演出含む)
印刷業者	キンコーズ(予算:ゼミナール運営費)	スピード印刷工房(予算:個人研究費)

表1は、授業内で学生により創作された2つの歌付き絵本の概要をまとめたものである。本稿では、2017年に創作した「もりのおんがくたい」と2024年に創作した「ころとまるのおひるね」の2つの歌付き絵本の創作過程の相違点を挙げ、作品を通して学生の表現したかったことや創作活動で得た気づきや学びについて考察する。倫理的配慮として、創作活動を始める前に、歌付き絵本の創作過程を研究で使用することを説明し、研究協力については任意であり成績と一切関係がないこと、研究で使用する際は個人が特定されることがないことを説明し、全員の同意を得た上で創作を開始した。

筆者が歌付き絵本の創作時に学生とイメージを共有するために例として紹介したのは、既出の『はらぺこあおむし』である。中野(2016)で絵本うた「はらぺこあおむし」を題材として、音楽(うた)と絵本の関連性について考察したが、絵本うた「はらぺこあおむし」は、テキストから歌詞になった際に言葉の省略や重複は見られたが、ストーリーは忠実に再現されていることが明らかになった。音楽的な特徴は、一部は有節歌曲形式が用いられているが全編を通して通作歌曲形式で作曲されており、全102小節の音楽構成は大きく6つの部分で展開されていた。しかし、絵本うた「はらぺこあおむし」のように絵本全編をうたにするのは教員・保育者養成の学生には難しいため、実際の創作時は物語の要所でストーリーの内容を加味した挿入歌を作曲し、読み聞かせの中で挿入歌を取り入れる方針で進めていった。挿入歌は8小節を基本とし、有節歌曲のように歌詞を変えて複数場面で活用することを想定していた。

Ⅲ. 事例検討

筆者の考える歌付き絵本の創作に必要な要素は(1)テキスト(ストーリー)作成・作画、(2)

作詞・作曲である。それぞれの事前準備として、テキスト（ストーリー）作成の練習で即興のお話作り・既存の物語を要約し絵本にした際のページ構成を考える、作画の練習で既存の童謡から紙芝居を作る、作詞の練習で既存の曲で替え歌を作る、作曲の練習で既存の絵本のテキストを歌詞として用いた作曲体験を試みていた。期間や人数などの製作条件は異なるが、2つの作品の創作過程を事例検討していく。

1. もりのおんがくたいの事例検討

「もりのおんがくたい」は、A短大2年次の卒業研究で、卒業制作の一環で創作した。本ゼミナールには、音楽表現系の研究を目的とした女子学生8名が所属していた。この作品は、8名で約3か月間という短い創作期間であったため、それぞれの原案は8名全員で考え、原案を元に作業を分担して進めていった。8名の分担は、ストーリー担当2名（学生A・B）、原画担当3名（学生C・D・E）、音楽担当3名（F・G・H）であった。

(1) テキスト（ストーリー）作成・作画

絵本のストーリーを考えるにあたり、登場人物や内容について8名で精査していった。動物を主人公にすることはすぐ決まり、運動会の話、ハイキングに行く話などの案が出ていたが、最終的に動物が楽器を演奏する童謡「山の音楽家」のような絵本を作る方向性に決まった。表2はストーリー原案、表3は登場する動物、表4はページ分割案をまとめたものである。

表2 「もりのおんがくたい」のストーリー原案

場面	概要
起	主人公が1人で寂しそうに楽器を鳴らしている
承	音楽仲間が増えていく → 全員（8人）集まる → 演奏会を企画
転	練習の様子 → トラブル（①楽器が壊れる、②音がずれる） → 解決
結	演奏会 → 大成功（主人公に仲間ができる） → 森の音楽隊を結成

表3 登場する動物について

登場順	名前	担当楽器	性格・特徴
1	らいおんくん	カスタネット	寂しがりや
2	たぬきくん	たいこ	友達思い
3	さるくん	タンバリン	元気、ムードメーカー
4	うさぎちゃん	ピアノ	音楽大好き
5	ぞうくん	トライアングル	優しい
6	くまくん	木琴	おっとり、のんびり
7	りすちゃん	鉄琴	食べるの大好き、マイペース
8	とりさん	笛	お母さん大好き、あわてんぼう



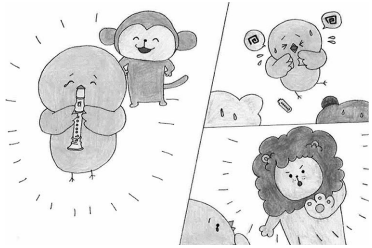
表4 「もりのおんがくたい」のページ分割案

ページ数	内 容
1	プロローグ らいおん（主人公）登場
2	寂しがりやのらいおんの独白（友達が欲しい）
3	たぬき登場 → 友達になる
4	さる登場 → 友達になる → ピアノの音が聞こえてくる
5	うさぎ、ぞう登場 → 友達になる
6	りす、くま登場 → 友達になる
7	とり登場（全員集合） → 演奏会を企画する
8	練習開始
9	トラブル①とりの笛がばらばらになる → らいおんとさるが解決
10	トラブル②くまの木琴の音がおかしい（うさぎが気付く）
11	りすが解決
12	練習再開
13	演奏会①
14	演奏会②
15	演奏会後
16	エピローグ（らいおんにもたんさんの友達ができました）

ストーリー原案を元に、登場する動物やその性格、担当楽器を決めた。卒業研究の一環で創作したため、自然な流れで自分たちをモデルとしてキャラクター化していった過程が印象的であった。性格造形もモデルの性格が反映され、具体的になされたと考える。また作品の中で動物の担当する楽器は、実際に自分たちが合奏できる楽器を基本とし、メロディー楽器担当（くま、りす）、既出の「山の音楽家」の組み合わせから連想した動物（たぬき、うさぎ、とり）や、身体の大きい動物（らいおん、ぞう）が小さく素朴な楽器を取って担当するなどの理由で組み合わせを決めていた。その後、ストーリー担当2名が中心となり、テキスト原稿案が制作された。

登場する動物の決定後、作画担当3名が中心になり、キャラクターデザインが作成された。それを元に、動物同士の大きさや色などの詳細は全員で決定した。この段階でストーリー担当と作画担当が協議し、テキスト内容と作画の内容が一致するよう調整を行った。次に、ストーリー案とページ分割案を元に、各ページの絵の構成案を考えた。その後、B5サイズで原画を作成し、背景の色塗りは全員で行った。

表 5 実際のテキスト原稿と原画

テキスト原稿	原画
<p>【テキスト原稿 1】 ここはにしのもり。おや？あそこに なんだかさびしそうな らいおんくんがいますよ。</p> <p>「はあ…。ひとりで カスタネットをするのは つまらないな…。」と らいおんくん。</p>	<p>【原画 1】</p> 
<p>【テキスト原稿 8】 「ねえねえ、なかまもふえたし れんしゅうをして もりのみんなに みてもらおうよ！」</p> <p>「いいね！ほく、おかあさんに みてもらおっと！」</p> <p>「わたしは おともだちを よんじゃおひ！」</p> <p>みんなは わくわくしてきました。</p> <p>「じゃあ、これから れんしゅうしよう！」</p> <p>「おー！！！」</p>	<p>【原画 8】</p> 
<p>【テキスト原稿 10】 「わああ…どうしよう…」 とりさんは びっくりして おろおろしています。 すると、「おちついて！」と らいおんくんが こえをかけました。 「ほくに そのこわれたふえを かしてごらん」 とりさんは こわれたふえを らいおんくんに わたしました。 「ここは こうじゃないのかな？」 さるくんも とりさんの ふえを なおすのを てつだってくれました。 「よし！なおったぞ！」 さるくんと、らいおんくんのおかげで、とりさんの ふえは もとどおり。 「ありがとう！」 とりさんは おおよろこびました。</p>	<p>【原画 10】</p> 

色塗りは色ムラを少なくするため、計画段階では絵の具を予定していた。しかし、B5サイズで原画を作成したため、登場する動物も多く、楽器などの細かい部分の色塗りは絵の具では難しいと判断し、色鉛筆（72色）に変更した。全体的に柔らかな雰囲気となり、絵本の内容とも合致が見られたと考えるが、広範囲を均一の濃さで塗る部分や、陰影で変化を付けたい部分の表現に苦労していた。またテキストとも関連するが、計画段階では原画の空きスペースにテキストを印刷するつもりであった。しかし、テキスト量が想定より多くなったため、印刷直前に見開きの左ページはテキストのみ、右ページは絵のみというページ構成に変更した。表5は、実際のテキスト原稿と原画をまとめたものである。各ページのテキスト量もばらつきがあり、最小のページは2行、最多のページは11行であった。最終的には原画の内容にテキスト量を合わせたからであると推察するが、絵本全体のバランスを調整することは、次回作の課題の1つになった。

(2) 作詞・作曲

作詞・作曲をする際の留意点として、挿入歌の音楽的特徴4点（小節数は8小節、調性はハ長調、拍子は4分の4拍子もしくは4分の2拍子、音域は幼児が歌える音域）を指定していた。

表6は、挿入歌の特徴をまとめたものである。有節歌曲形式を選択し、同一のメロディーに異なる歌詞を当てはめていく方法で作曲していったが、歌付き絵本「もりのおんがくたい」は音楽劇にすることも想定していたため、挿入歌の歌詞でも物語の内容全般が伝わるよう意識していた。ストーリー案ができた時点で、挿入歌のイメージについて全員で意見を出し合って共有し、モチーフ案（譜例1）を作曲した。その後、音楽担当3名がテキスト原稿から単語を抽出して1～7番の歌詞を作詞し、モチーフ案に続けてメロディーA（譜例2）を作曲した。次に、歌詞の内容に合わせてメロディーAを転調させてメロディーB（譜例3）を作成した。4・5番の歌詞の内容は練習時のトラブルであり、長調から短調への転調を検討した。幼児の歌唱声域を考慮した結果、ハ短調以外への転調が難しかったため、同主調の関係であるハ短調を選択した。また5番

表6 挿入歌の特徴

番	歌詞	歌詞の内容	調性
1	寂しがりやのライオンくん 友達思いのタヌキくん いつも元気なサルくん ほら三人あつまりました	登場動物の紹介① (2～4 ページ)	ハ長調
2	音楽大好きウサギちゃん いつも優しいゾウくん おとりのんびりクマくん ほら食べるの大好きリスちゃん	登場動物の紹介② (5・6 ページ)	ハ長調
3	上から見ていたトリさん お母さん大好きトリさん みんなあつまり始めよう さあ楽器を合わせる練習を	登場動物の紹介③ (7 ページ)	ハ長調
4	ぼくの大事な笛が… バラバラに壊れたよ ぼくの楽器も変だな… あらどんぐり挟まってたよ	トラブル発生→解決 (9～12 ページ)	※転調① ハ短調
5	壊れた笛をなおさなきゃ みんなで練習できないよ 優しいみんなが考えて ほら元通りになりました		※転調② ハ長調
6	一人ぼっちのライオンくん 仲間が集まり演奏会 みんなの夢もかなったよ！ さあ僕らはすてきな音楽隊	演奏会後の大団円 (15・16 ページ)	ハ長調
7	僕らは森の音楽隊 みんなで仲良く演奏会 楽しい音楽作りましょう またみんなで遊びに来てね		

の後半4小節はトラブル解決場面にあたるため、ハ長調に戻したメロディー B' (譜例4)とした。最後にメロディー A・Bの伴奏を考えた。伴奏形は3つのパターンを試演し、イメージに近い伴奏を全員で選択し、メロディー Aは和音を4分音符で分割する形になった。メロディー Bは、メロディー Aと変化を付けるため2分音符にアルペジオを付け、より不安感が出るよう工夫した。

保育現場で子どもたちと実際に歌うことを想定し、耳馴染みの良いメロディーライン、実際に歌った場合に歌いやすく覚えやすい歌詞を目標にしていた。1・2小節目と3・4小節目は同一リズムを活用し、覚えやすいような工夫が見られた。また5・6小節目の3拍目まで同じリズムの中、4拍目に8分音符のアウトタクトを用いている点が、この曲の特徴の1つであると考え。この4拍目の歌詞に「ほら」「さあ」「あら」の感動詞が繰り返し使われていることで、曲全体に統一感が出て、曲調も躍動的になったと考える。また最後の8小節目では4度の跳躍進行が使われているが、作曲をする過程で「曲の終わった感じを出したい」と言っていたため、発表会などでおじぎをする際に活用されているコードを意識したと推察する。調性をハ長調とハ短調の2つにし伴奏形も変えたことで、絵本の内容と音楽から受けるイメージがより合致したと考える。

譜例1 もりのおんがくたい (モチーフ案)



譜例2 もりのおんがくたい メロディー A (1番)



譜例3 もりのおんがくたい メロディー B (4番)



譜例4 もりのおんがくたい メロディー B' (5番)



(3) 歌付き絵本完成後の発表

完成後、絵本を台本にした創作音楽劇『もりのおんがくたい』を子ども向けイベント内で上演した。演出として劇中で手作り楽器を配り、子どもと一緒に合奏に参加できるような工夫をしていた。写真1・2は、演奏会の場面の原画と音楽劇での演奏会の様子である。うさぎ役の学生Fが当日欠席であったため、さる役だった学生がうさぎ役になり、担当楽器をタンバリンに変更しているが、音楽劇で絵本をなるべく忠実に再現しようとしていた。

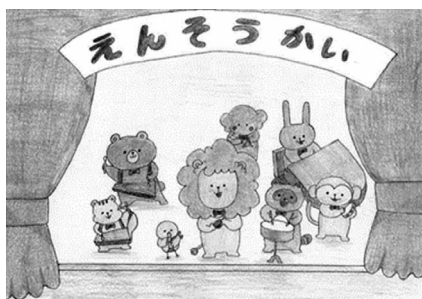


写真1 演奏会の場面の原画



写真2 劇中の演奏会の様子

2. ころとまるのおひるねの事例検討

「ころとまるのおひるね」は、B大学3年次の児童教育研究(1)を経た4年生2名(学生a・b)が、卒業研究の一環で創作した。0～5歳児で活用できる絵本を目指していたため、オノマトペをなるべく多く取り入れることをねらいとし、創作活動に取り組んだ。この作品は2名での創作であったため、全作業について納得のいくまで2名で協議し、少しずつ具体的にしていって姿が見られ、試行錯誤しながら進めていった。

(1) テキスト(ストーリー)作成・作画

絵本のストーリーを考えるにあたり、最初にテーマを考えた。自分たちが保育現場で活用することを想定していたため、クリスマスやお誕生日会などの行事に関連する内容、食育や歯磨きなどの生活習慣に関連する内容などが候補に挙がっていたが、最終的にファンタジー要素を取り入れた内容に決定した。ファンタジー要素を具体的に考えていった結果、登場人物の夢の中の出来事となり、風船で空を飛ぶ話になった。絵本のストーリーを、昼寝をする前、夢の中の冒険、昼寝から覚めた後にすることで、午睡前やおやつの時間の導入にも繋げられるよう考えていた。ストーリー案を考えるにあたり、2つの目標を自分たちで課していた。1つ目は、オノマトペを意識的に取り入れることで、0～5歳児の子どもが情景や心情をイメージしやすいよう工夫すること、2つ目は、登場人物のやり取りを通して、友達と仲良くする大切さや一緒に遊ぶことの楽しさを伝えられるようなストーリーにすることであった。2つの目標を踏まえ、ストーリー原案と登場する動物を決定した。表7はストーリー原案をまとめたもの、表8は登場する動物をまとめたもの、表9はページ割案をまとめたものである。

表7 「ころとまるのおひるね」のストーリー原案

場面	概要
起	2人が遊んでいる → 昼寝をすることになり1人が夢を見る
承	夢の中で2人が遭遇する → 風船を見つける → 空を飛びながら冒険する
転	2つの島で遊ぶ → トラブル（風船に穴があき、しぼんで飛べない） → 解決
結	3つ目の島に移動 → 夢から覚める → 2人でおやつを食べる

表8 登場する動物について

名前	性格	見た目の特徴
ころ（猫）	元気いっぱい 食いしん坊 好奇心旺盛で怖いもの知らず	魚型のポシエットを身に付けている 風船の色はオレンジ
まる（羊）	優しい 気遣いができる 臆病だが楽しいことが大好き	蝶ネクタイをしている 風船の紐にリボンが付いている 風船の色は赤

ストーリー原案を元に、登場する動物やその性格、見た目の特徴を決めた。2名での創作であったため、登場人物は各自、好きな動物を選び、キャラクターを検討していった。子どもの身近な動物である犬、猫、りす、たぬきを最初に候補として挙げ、学生 a が近所の野良猫から着想を得てころ（猫）を提案し、学生 b は猫と同じぐらいの大きさでも違和感がなく、毛がふわふわで絵本に可愛らしさを足せると考え、まる（羊）を決定した。ころとまるは仲良しの設定にし、性格を対照的（好奇心旺盛と臆病）にすることで、具体的なストーリーや会話の流れを考えやすくしていた。

本作は「もりのおんがくたい」で各ページのテキスト量の偏りが見られた反省を受け、全ページの構図案（テキスト原稿案とレイアウト案）を考え、ページ分割案を決定した。その後、テキストを先に印刷し、印字後の用紙に原画を描く工程にした。構図が決まるまでに時間を要したが、1冊を通して全体のバランスは取れたと考える。

表10は、使用したオノマトペをまとめたものである。また原画によっては、オノマトペは手描きも活用し、文字から受ける印象でも内容を表現しようとする工夫が見られた（写真4参照）。多くのオノマトペを意図的に取り入れることで作品に臨場感や躍動感が生まれと考える。オノマトペの活用方法を通して、2名の創作上のこだわりや細部まで作り込む様子がうかがえた。

表11は、原画9ページの製作過程をまとめたものである。細かく調整しながら進めることで、自分たちのイメージを具体的にしていく様子が見られた。色塗りは、色鉛筆（36色）を主に使用したが、クーピー（48色）も併用し、なるべく自分たちのイメージに近い色を選んでいった。また背景を細かく描いた原画（写真3参照）と背景をほぼ描かず登場人物を目立たせる原画（写

表9 「まるところのおひるね」のページ分割案

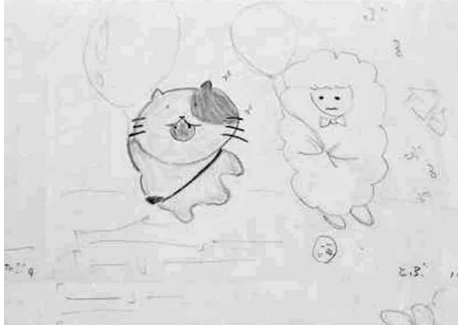



ページ数	内 容
1	プロローグ ころ、まる登場
2	ころがまるの家に遊びに来る
3	まるのお母さん登場 → 2人に昼寝の時間だと伝える
4	布団に入って昼寝をする → まるが夢を見る
5	まるの夢の世界が始まる
6	散歩中に2人が会う
7	お花畑の中で風船を見つける
8	風船を持ったころが浮き上がる → まるも慌てて風船を持つ
9	空を飛ぶ → 冒険が始まる
10	1つ目の島を見つける
11	ステッキを持って魔法をかけ合う
12	魔法の島でころは小さく、まるは大きくなる
13	再び空を飛んで次の島に向かう
14	2つ目の島を見つける
15	お城のドアを開ける
16	ドレミの島で不思議な音を鳴らして遊ぶ
17	トラブル まるの風船に穴があいて空を飛べなくなる
18	ころが魚型のポシエットから絆創膏を取り出し風船に貼る
19	空を飛んで次の島に向かう
20	最後の島を見つける
21	たくさんの大きなお菓子を見つける
22	お菓子の島でお菓子を食べる
23	ころがまるを起こす → 夢から覚める
24	まるがころに夢を見たことを話す → おやつを待つ
背表紙	2人でおやつを食べる

表10 使用したオノマトペ一覧

オノマトペ	表現したかった状態	オノマトペ	表現したかった状態
うとうと	入眠の様子	わくわく	空を飛ぶまるの心情
すやすや	睡眠の様子	きらきら	魔法のステッキの輝き
てくてく	散歩の様子	しくしく	まるが泣く様子
わいわい	喋っている様子	くんくん	ころが匂いを嗅ぐ様子
ふわふわ (挿入歌の歌詞)	飛んでいる様子	ばくばく、ばくばく もぐもぐ	2人が大きなお菓子を 食べている様子
どきどき	空を飛ぶころの心情	そわそわ	ころがおやつを待つ様子

真4参照)を描き分けていたのも工夫の1つであるとする。

表11 原画9ページの製作過程

1. 構図案 (テキストと絵の配置を決める)	2. 印字後、下描きと色塗り (仮)
	
3. 下描きの調整・決定	4. 原画の完成
	

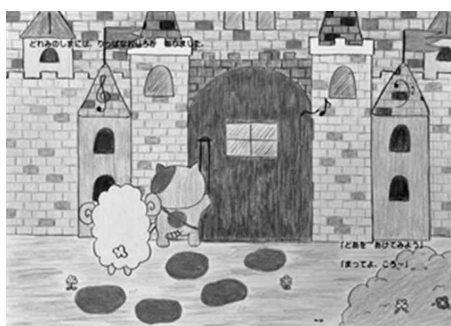


写真3 背景の細かい原画例



写真4 背景の少ない原画例

(2) 作詞・作曲

前述したように作詞・作曲をする際の留意点として、挿入歌の音楽的特徴4点（小節数は8小節、調性はハ長調、拍子は4分の4拍子もしくは4分の2拍子、音域は幼児が歌える音域）を指導していた。前作同様、有節歌曲形式を選択し、絵本の中で3回出てくる風船で空を飛ぶ場面の様子を挿入歌にした。最初はト長調で、付点リズムを活用して作曲していたが、絵本の製作過程でイメージが変化したようで音域を全体的に下げて、ハ長調で作曲をし直していた。表12は挿入歌の特徴をまとめたもの、譜例5は完成した挿入歌の楽譜である。

絵本の読み聞かせの実践の際、空を飛ぶ場面で挿入歌も歌ったが、練習過程で、歌詞が複数ページの内容を表していることに気づき、歌うタイミングが決められなかった。協議の結果、急遽、筆者が4小節目の後に間奏4小節（譜例6参照）を追加で作曲し、間奏部分で該当ページのテキストを読み上げることとした。間奏部分のイメージを聞き取りした結果、「静かなBGMの感じ。音読後はすぐ歌いたいから終わる合図は欲しい。」との希望であった。3パターン提示し、1番イメージに合うのを選択してもらった。テキスト音読のBGMになるよう全音符の和音のみの構成にし、間奏の最後の4小節目のみベース音を4分音符で刻み、間奏が終わる合図とした。挿入歌「ころとまるのおひるね」は、伴奏も自分たちで作曲していた。前半4小節は、2拍もしくは4拍で変化していくコード進行が特徴であると考え。和音のベース音がC→D→E→Fと1度ずつ上行しており、高揚感が表現されているのではないだろうか。また、最初の2拍は分散和音になっているが、ふわふわ飛んでいる様子をイメージしていたと推察できる。7小節目には、2拍を均等に割った6連符のリズムが使われており、次の島の期待感が音型でも表されていると考える。

表12 挿入歌の特徴

番	歌詞	歌詞の内容	演奏のタイミング
1	ふわふわ浮かぶぞ風船 仲良し2人の冒険 (間奏) どきどきわくわくころとまる どこへ飛んでいくんだろう	冒険のはじまり (9・10ページ)	8ページ直後 9ページを音読 9ページ音読後
2	ふわふわ浮かぶぞ風船 きらきら魔法使いだ (間奏) 大きくなったり縮んだり 次はどんな島だろう	魔法の島の思い出 (11～13ページ)	12ページ直後 13ページを音読 13ページ音読後
3	ふわふわ浮かぶぞ風船 不思議な音で遊んだ (間奏) お助け道具をありがとう 次の島はどこだろう	ドレミの島の思い出 トラブル→解決 (16・18・19ページ)	18ページ直後 19ページを音読 19ページ音読後

譜例 5 挿入歌「ころとまるのおひるね」の完成譜

♩ = 110

ピアノ

ふわふわうかぶぞ ふ うせん なきふ からし よき しらな ふまお たほと りうで のつあ

ほかさ うけん だた どおた きおた ききく わなど くろう わたく くりを こちあ るちり またご るりう

ういん だた きおた きおた きおた きおた きおた きおた きおた きおた

譜例 6 間奏の楽譜

(3) 歌付き絵本完成後の発表

完成後、附属幼稚園の延長保育の時間に向向き、異年齢の約 20 名に向けて「ころとまるのおひるね」の読み聞かせを行った。また演出として、主にオノマトペの部分で、9つの楽器を活用し、挿入歌以外でも効果音や BGM でも絵本の世界観を表現しようと試みた。写真 5 は読み聞かせの様子、写真 6 は音の演出で使用した楽器である。



写真 5 読み聞かせの様子



写真 6 使用した楽器

IV. ま と め

歌付き絵本の完成後、それぞれ子どもたちの前で発表し、その後、振り返りを実施した。表 13 は「もりのおんがくたい」の音楽劇発表後の感想をまとめたもの、表 14 は「ころとまるのお

ひるね」の読み聞かせ後の感想をまとめたものである。

表 13 音楽劇発表後の感想

学生	感想
A	子どもたちがたくさん来てくれたので、劇中で一緒に歌ってくれたり手作り楽器で合奏に参加してくれたり楽しい本番になった。練習ではなかなか上手いかず不安でいっぱいだったが、本番は1番上手くできて良かった。
B	絵本を元にしたオリジナルの音楽劇をしたが、お客さんもたくさん来てくれて、最前列の子どもたちが手遊びをまねしてくれ、想像よりも盛り上がった。絵本の製作中や劇の練習中は色々問題が起こり、上手く進めず悩んでいたが、本番が近づくと団結していった。合唱の後は大きな拍手をもらったが、合奏は手作り楽器を渡すのに時間がかかり間延びしてしまった。シミュレーションがもっと必要だったと思う。
C	絵本から台本にするのに変更点もあったり大変だった。練習は人数がそろわず不安だったが、本番はみんな素敵な表情で演じ、歌も振り付けも合奏もできたのではないかなと思う。色々あったけど、最終的には子どもたちに楽しんでもらったので良かった。
D	私は毎日参加し家でも何度も練習していたが、全員そろって練習ができず大変だった。リハーサルでは大道具の配置トラブルもあったが、本番では改善できた。リハーサルをしたことで本番に直すところが見つかり、充実した2日間だった。
E	練習は揃うことがあまりなく、本番がとても不安だったが、子どもたちがたくさん来てくれたときにみんな笑顔になれて、本番は1番できて良かった。反省はもっとみんなでもっと練習すること。
F	当日欠席
G	本番で1番上手くできて良かった。最初はオリジナルの絵本製作や楽曲作りを目的に活動し、次に自分たちで劇の内容や構成を考え、難しかったり工夫に苦労した部分はたくさんあったが、お客さんが笑ってくれたり、一緒に歌ってくれた姿をみて、楽しんでもらったのが嬉しく、達成感を味わうことができた。
H	大成功だった。1番最高な劇ができた。みんなでたくさん話し、団結力が増したと思う。楽しかった。

表 14 読み聞かせ後の感想

学生	感想
a	幼稚園での読み聞かせでは、始まってすぐに「猫ちゃん可愛い」と言う子どもの声が開こえてきて、キャラクターデザインから担当してきたころを褒めてもらったことがとても嬉しかった。色合いも含めて、猫のころを可愛く描けたことに満足している。絵本の感想を発表してもらった際、5歳児クラスの子が「めっちゃめっちゃ楽しかった」と笑顔で言ってくれたことが印象に残っており、頑張ってた良かったと心の底から思う瞬間だった。また、3歳児クラスの子の「音がいっぱいあって面白かった」という感想を聞いて、物語や絵を見てもらうだけではなく、歌や楽器等を掛け合わせることで、絵本に幅広い楽しみ方が生まれると実感した。実践を通して、絵本に対する子どもたちの反応を直接知ることができた。
b	とても緊張していたし、子どもたちは急にきた私たちの発表を楽しんでくれるのかという不安もあった。しかし本番が始まると、子どもたちは絵本に集中して見てくれた。私は練習の通りに上手くできたと思うが、セリフを読んで楽器を鳴らすことで精一杯で、子どもたちの方を見る余裕は無かった。もう少し子どもたちの様子を見ながら、反応が良いページを長く見せる時間があっても良かったと反省した。子どもたちが感想で、「絵が可愛かった」、「音が面白かった」と言ってもらえ、こだわった部分を楽しんでもらえて嬉しかった。「風船はなんで割れたの」と質問してくれた子どももいて、しっかり聞いてくれていたんだと実感できた。風船については、木の枝が刺さり割れてしまったという設定だが、絵本の中ではなぜ割れたかを文字では書いていないため、割れているシーンで木の枝を指で差すと分かりやすかったのではないかと考えた。

両作品に共通して、製作過程や練習は大変であったが、子どもたちの楽しんでいる様子や実践に対する素直な反応を間近で見たことで、学生たちは充足感や達成感を得たと考える。また複数人数での継続的な活動を経て、協働性を高めることもできたのではないだろうか。反省点や改善点についても複数の学生が述べており、実体験を通じた具体的な気づきも多かったと推察する。今後も成果物を創作した際は、発表する機会も取り入れていきたい。

2つの歌付き絵本の製作過程を事例検討し、各過程で自分たちのイメージを少しずつ具体的にしていく様子、アイデアを出し合い影響を受け合いながら表現が変化していく様子、表現上のこだわりや創意工夫などが見られた。「もりのおんがくたい」は8名での創作であったため、全員で行う活動と分担して行う活動に分けて創作したが、テキスト案と原画案を中心になって作成した学生の負担が大きく、作業量に偏りが見られた。2名で創作した「ころとまるのおひるね」は、細部にまでこだわりが見られ、些細なことでも納得のいくまで協議しながら進め、より良い作品にするため授業以外の時間にも自発的に作業をしていた。創作期間も想定以上に長期化し、作業負担は大きかったと推察する。

また2つの作品で共通して、テキストの表記に苦労していた。「もりのおんがくたい」では初稿では全て平仮名にしていたが、校正時に内容が伝わりにくかったため、カスタネットなどの一部の楽器を中心にいくつかの単語をカタカナに変更した。「ころとまるのおひるね」では、テキスト印刷の段階で、何度もテキストの配置を調整し、ナレーションと台詞を使い分けることで平仮名だけでも内容が伝わるよう工夫していた。またオノマトペを中心に敢えて手書きで文字を書く部分も作り、よりニュアンスが伝わるような表現方法も取り入れていた。テキストの表記は苦労した半面、両作品の工夫やこだわりが表れていると考える。より良いテキスト表記の方法は今後も検討していきたい。

2025年は4名で歌付き絵本「ポコじいにとどけるすてきなプレゼント」を創作中である。ストーリー原案や登場人物を決めた後、キャラクターデザインを4名のコンペティションで決めるなど、独自の創作過程が見られている。挿入歌に関しても、ポコじいへのプレゼントの一環で歌う曲として作詞・作曲が進んでおり、本2作ともまた異なる良さのある作品になると期待している。歌付き絵本の創作活動では「子どもたちに伝えたいこと」「自分たちの表現したいこと」を大切に、絵・文・音楽それぞれで自分たちの考えや思いを表現して行ってほしいと考える。また自分たちの表現が目に見える成果物として形になるため、学生が自己肯定感や達成感を体感できる活動になるだろう。学生の気づきや学びから、歌付き絵本の創作活動は、領域「表現」の観点である「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」を十分に体験できる活動であり、実践も取り入れることで総合的な表現活動になり得ると考える。今後も学生の主体性や自己表現を尊重し、楽しみながら協働できる音楽表現活動を検討していきたい。

引用・参考文献

- 内山菜津子（2020）「保育者養成における絵本を用いた音楽表現指導の実践報告」『こども教育宝仙大学紀要』11巻, pp.85-89.
- 澤田悦子（2014）「科目「こどもと音楽」を通じた保育者養成－童謡の歌唱からイメージした絵本を作成する試み－」『北翔大学短期大学部研究紀要』第52号, pp.59-68.
- 中野圭子（2016）「音楽（うた）と絵本の関連性についての一考察－絵本うた「はらぺこあおむし」を題材として－」『西日本短期大学総合学術研究論集』第6号, pp.69-79.
- 中野圭子（2018）「保育士養成校における音楽表現に関する一考察（Ⅱ）－歌付き絵本「もりのおんがくたい」を創作して－」『西日本短期大学総合学術研究論集』第8号, pp.119-126.
- 中野圭子（2023）「保育者養成校における総合的な表現活動に関する一考察－領域「表現」から考える創作音楽劇の意義－」『園田学園女子大学論文集』第57号, pp.53-62.
- 中野圭子（2025）「教員・保育者養成課程学生の音楽表現活動に関する一考察－創作活動の事例検討を中心にして－」『園田学園女子大学論文集』第59号, pp.75-89.
- 柚木たまみ（2020）「絵本を用いた音楽表現活動－専門演習Ⅰ・Ⅱにおける学生の実践活動報告から vol.1－」『滋賀短期大学研究紀要』第45号, pp.231-241.
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館.

教材として取り上げた絵本

- エリックカール・もりひさし（1976）『はらぺこあおむし』偕成社
- さいとうしのぶ（2013）『おべんとうばこのうた』ひさかたチャイルド
- せなけいこ（2009）『おばけなんてないさ』ポプラ社

[なかの けいこ 音楽教育学]